

南極雑感

吉田栄夫

三年生が突然御来駕あって、お茶の水地理というのがあるが、知っているかという。知らないと答えると、早速サンプルを取出して何か書けと云われる。期日は来週水曜で5枚と云う。何しろ1月に着任したばかりで、西も東もわからず、つい先日も試験の監督で、附属高校つて何処ですかと貝山さんに御聞きしてニヤニヤされたばかりという状態である。僅か救回教壇に立つて眺め廻してみたものの、皆おとなしくペンを走らせているばかり、従って新米教師たるもの、学生諸姉がどのような生活と意見をお持ちなのか未だ察することができない。そこで、私が一年余りを過した南極での生活の一駒を書き綴つて、賣を果すことにしたい。

南極の様なところに、15人の男が1年暮すということになれば、さぞかし変った生活を営むのであらうと想像され、帰つてからいろいろ好奇的な質問を受けることが多かつた。確かに、時にはあの痛ましい悲劇——主として私が関与して起きた遭難——が、あつという間に起きるといった厳しさのつきまとう環境、その中で、それぞれの専門を持った年齢構成も、職業も異なる集団が生活を営むのであるから、或る面では極めて特異なケースと云えよう。しかし、基地における生活は、その大部分が、むしろごく普通のものであり、場合によっては内地のそれより遙かに人間らしさを取戻してくれる。

朝の食事を知らせるサイレンに始まる比較的規則正しい日常は、全く楽しみに満ちたものだった。吐く息を凍らせながら、斜めに低く傾いた薄い陽光の中を、犬橇を走らせる。犬の吐く息は、毛に凍りついて細かな氷滴となり、金色に輝く。小休止の合間に吹溜りの上に寝ころんで冷たい雪の感触を楽しむ。夜ともなれば、観測や設営の仕事からほっとくつろいで、全員が食卓に集う。さまざまな会話が交される。年齢順に並んだテーブルでは、自然話題が二つに分れることが多かつた。天体の南極の空での運行について、人工衛星の飛び方について、エレクトロニクスについて、樺太犬の習性について等々、多くの事に独自の見解を示すS、人の盲点を衝く疑問を出すF、黙って聞いている別のF……

冬の夜長には“昭和大学”が開かれた、それぞれの専門についての講義がある。居眠りの得意なEの姿はいつもみんなの微笑を誘う。私の住んでいた居住棟（観測棟と云つた方がよいほど、地磁気、オーロラ、宇宙線の観測機

械が並んでいる)でも、ゼミナールを開いた。全く異った専門分野の話の聞き、それぞれの考え方に接することができたのは、私にとって何にも増しての収穫であったような気がする。オコガマしくも、地理学の話をして、現在の地理の諸分野について、幾分なりとも認識を改めてもらえたらしい。

自然はまた、時にすさまじい形相を呈することはあつても、多くの美しいものを恵んでくれる。暗い大空に、青、黄、オレンジ色、時には赤から紫まで、巨大な裳裾を広げるオーロラ。それが風に煽られるように躍動する妖しい美しさには寒さも忘れて魅せられる。

低い太陽と、氷との織りなす光の交錯は超現実的な世界を作り出す。空に浮かぶ雲とともに、何とさまざまな色調に包まれたところと、夢見心地になることも多い。空に漂って光をやわらげる氷の微晶は、夜には星の光を混して変光させる。星が青から赤にまた青に、チカチカと輝くのは、私にとって一つの発見であった。

このような環境は、また人を宗教的にさせるものらしい。信仰薄き私でさえ、常日頃あまり考えないような事を思い浮べる。たった一人、見渡す限り雪ばかりの大陸の上で、強風に送られてくる漂雪の流れる音を聞いていると時に云いようのない空しさに襲われることがある。何と広く偉大な自然に何と小さくはかない人間の営みであることか。しかし、またこのようなところでさえ、氷の厚さを探り、自然の姿を知ろうと努めることは、人間の特権である。時に謙虚になりながら、時に斗争的になりながら、ひたすら雪原をさまよつたものであった。

基地よりも教段厳しい自然の支配するフィールドで、仕事をする時には、また、種々の条件が重なる。低温のための思わぬ機械の故障、悪天候による止むを得ざる沈没、そして最後に、予定した、そして仕残した仕事をどこで打切るかが常に問題となる。時には熱した議論が討わされる。しかし、誰でも自らの事のみを主張はできないのである。かくて一方では心を残しつつ、他方では幾分かの満足感を抱いて帰路を急ぐことになる。

十人十色の集団生活は、お互いの立場の理解なしには決して行えるものではない。共通の目的を持ち、お互いの善意と協力に支えられた越冬生活の素晴らしさは、何物にも換え難い。懐しきは日を追って増してくる。

